

第 7 回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1 . 日 時            2 0 0 3 年 3 月 1 1 日（火）1 0 : 3 0 ~ 1 1 : 2 0
- 2 . 場 所            中央合同庁舎第 4 号館 6 階 共用 6 4 3 会議室
- 3 . 出席者           藤家委員長、木元委員、竹内委員  
                        内閣府  
                        榊原参事官（原子力担当）、犬塚参事官補佐、川口参事官補佐  
                        文部科学省  
                        原子力課 核融合開発室 大竹室長
- 4 . 議 題  
    ( 1 ) 第 8 回 I T E R 政府間協議の結果について  
    ( 2 ) 市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について  
    ( 3 ) 藤家委員長の海外出張報告について  
    ( 4 ) その他
- 5 . 配布資料  
    資料 1 - 1        第 8 回政府間協議について  
    資料 1 - 2        共同プレス・リリース  
    資料 1 - 3        サイト共同評価報告書について  
    資料 2            第 8 回市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について（座長報告）  
    資料 3            藤家原子力委員長の海外出張報告について  
    資料 4            核燃料サイクルのあり方を考える検討会（第 5 回）議事次第  
    資料 5            第 6 回原子力委員会定例会議議事録（案）
- 6 . 審議事項  
    ( 1 ) 第 8 回 I T E R 政府間協議の結果について  
  
        標記の件について、大竹室長より資料 1 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。  
        （木元委員）青森県知事から我が国にサイトが決まった場合のメリットにつ

- いて話があったと思うが、放射性廃棄物の処分に関して話はあったのか。
- (大竹室長) 六ヶ所については、放射性廃棄物処分施設が近隣にあって、地元住民も放射性廃棄物を処分することに同意しており、報告書にもポジティブに記載されているため話はなかった。知事の方からは、六ヶ所についてアクセスのことや生活周りのことが懸念されているが、その点は大丈夫であると話があった。
- (木元委員) 六ヶ所について、発生した放射性廃棄物をサイト近隣できちんと処理処分する覚悟があるということを説明しているのか。他極のサイトについては、放射性廃棄物について議論されているのか。
- (大竹室長) きちんと処理することは話をしている。放射性廃棄物の処理について、他極との比較は行っている。他極は、サイト内で処理はできないが、しかるべき国内処理を行うと話している。しかしながら、六ヶ所に比べると若干の不確実性がある。日本ではITERから発生する廃棄物は低レベル放射性廃棄物として処理し、処分方法もある程度の見通しがついており、経費等も算定されている。一方、例えばフランスの場合、最終的に処分するのではなく、恒久保管であり、必要な経費は算出しているが、放射性廃棄物を一度預けた後、支払はそれで終わりになるのか、それともその後も追加の費用を求められることになるのか、まだ明確になっていない。コスト面では、カナダが非常に安いコストを提示しているが、この値はまだ検討中の値である。EUの2サイトは日本と同じようなコストである。ただし、日本の場合、サイト内で処分する方法も考えており、比較的安いコストも提示している。
- (竹内委員) 六ヶ所については、外国人との接点として三沢がある。また、最近では、フランス人が数十人単位で、既に常駐しており、子供の教育問題や病院の問題など、外国人の居住に関する課題は、かなりクリアされていると思う。
- (木元委員) 現地の様子をビデオなどに撮り、機会があれば外国の方に見せた方が良いと思う。
- (藤家委員長) 例えば、EU加盟国であればどの国が話してもEUの発言になる。カナダの場合、本会合では、当初EUの極に入っていたが、EUの極から離れると、カナダ一カ国で極になった。また、中国が参加すると極になった。極の定義は何か。
- (大竹室長) ワンボイス(一つの意見でまとまっている)で参加する国の集まりという意味である。カナダがEUの極から離れたときは、もともとEDA(工学設計活動)の申し合わせで、「EDA参加国、または、サイト提案国は交渉極になれる。それ以外の国については、技術的な観点などを

考慮し、既存の交渉極が全会一致の場合のみ交渉極と認められる」ということで合意しており、カナダの場合は、まさにサイト提案国であったため交渉極になった。

( 藤家委員長 ) E Uは一つの極としてみるのか。それともフランスとスペインは別々になるのか。例えば、日本でも当初は3つのサイト候補地があったが、努力して一カ所に絞った。当初は、1つの極が提案できる候補地は1つであると決まっていたのではないのか。

( 大竹室長 ) E Uは一つの極としてみる。当初の取り決めでは、原則「single site of single each party」と記載されている。当初、E Uからは、いずれ候補地を一つに絞るからということで2候補地が提案されたが、結局絞れないまま今日に至っている。実際、会議では、E Uの中で物事が決め切れていないことについて指摘され、大きな議論になり、E Uの印象が良くないのは事実である。

( 藤家委員長 ) その結果が、サイト決定上、どのような形で反映されるのか。何人の人が何票もってどうなるのか見えていない。

( 大竹室長 ) それについてはまだ決まっていない。どのような決め方をするのかについて、これから議論することになるが、候補地を一つに絞っていないことは無責任なことであり、強く指摘されることになると思う。

( 藤家委員長 ) 今回、中国が参加できるようになったのは、全会一致であったからであると聞いたが、この会合はクローズなものなのか。

( 大竹室長 ) セミクローズなものである。関係者の理解では、国連などとは違い、ITERという極めて特異な装置を作らなければならないものであり、参加国はしかるべき技術貢献があるべきと考えられている。したがって、EDAを行ってきた国々は認証されている。それ以外の国について、核融合の研究について下地があるかどうかについて考慮して参加の是非を決めた方が良くと考えられ、セミクローズな組織になっている。中国が加入したときは、日本の関係者も参加した国際チームが現地を視察し、特許などの法的問題、核不拡散の問題など、参加するための決まりを説明した上で、双方納得し、参加することが決まったものであり、このような手続を踏まないと参加できないことは仕方がないことだと思う。

## ( 2 ) 市民参加懇談会コアメンバー会議の結果について

標記の件について、犬塚参事官補佐より資料2に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(木元委員) 前回、東京で行われた市民参加懇談会では第１部・第２部の構成で実施したが、今回も二部構成で実施する。第１部は、まず私から御報告するが、報告する内容については、事務局が素案を作成し、その素案を全コアメンバーでチェックをした上で当日の御報告とする。このような手順で行うのは、核燃料サイクルについて、まだ御理解されていない部分があると思うし、御理解された上で御批判もあるだろうと思う。そこで第１部では、「なぜ日本がこのような核燃料サイクルという方策をとったのだろうか」ということを踏まえた上で意見交換することが重要であり、日本の原子力の当初からの変遷について、再処理の問題や高レベル放射性廃棄物の返還、あるいは、今度の「もんじゅ」の判決などいろいろな事故事件があったが、それらを、時系列的に説明させていただき、現状に至っていると。その上で、「知りたい情報は届いていますか」という今回のテーマについて話し合う予定である。第２部は、参加者が約２００名以上になると想定しているが、第１部の話を元に、会場参加者から御意見を伺う予定である。日本原燃、原子力安全・保安院、資源エネルギー庁の方々にも控えていただく。結果はまた御報告するが、私自身も結果がどうなるのか興味を持っている。資料の「(２) これまでの活動からの整理について」では、開催の形態については、フレキシブルに考えていこうという結論になった。ずっと同じ形式で実施するのではなく、その都度、何故その地域でやるのか、その地域には何のテーマがふさわしいのか、といったことを考えた上で、その場合には、どのような形態にしたら良いのか自由に考えていくことで合意された。市民参加懇談会は、日本が生きていくためには、エネルギーがどうあるべきかということを基盤におき、いろいろなことを今まで実施し、市民の方々からも広くお話を伺ってきた。このような今までの活動について、市民参加懇談会としてまとめたものを作成する必要があるのではないかということになり、３月１５日の「市民参加懇談会 in 青森」の後で、もう一度コアメンバー会議を開催し、まとめ方について検討していくことになった。また、コアメンバー会議において、今後どのような議論をしていくのかについても話があり、それもフレキシブルに考えていくことになった。継続していくことに意義があり、形骸化しないような形でこれからも続けていくことで一致した。

### ( 3 ) 藤家委員長の海外出張報告について

標記の件について、川口参事官補佐より資料 3 に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

( 藤家委員長 ) I A E A ( 国際原子力機関 ) エルバラダイ事務局長と話し合いができたのは有意義であったと思う。北朝鮮の問題に関連して、世界、特にアメリカなどにおいて、日本も核武装すべきだという議論があるので、日本の立場を明確にした方が良くと思い、今までの原子力委員会での議論を踏まえ、広島・長崎の問題、日本の法的問題、さらに、どう評価しても実益に比べて損失が大きすぎるということから、日本が核武装することはない旨を申し上げた。また、原子力委員会は、そのような動きには、正面からきちんと対応すると説明を行った。エルバラダイ事務局長及び同席した方々が、日本が核武装するなどとは思ってもいないだろうが、このような席で話した意味合いはあったと思う。また、核燃料サイクルについては、最近、G E N - ( 第 4 世代原子力システム )、I A E A の I N P R O ( 革新的原子炉開発プロジェクト ) などの動きが活発であり、I A E A は I N F C E ( 国際核燃料サイクル評価 ) の会議もあり、もう一度この問題について、明確な意思表示をする時期が来ているのではないかと申し上げた。さらに、邦人職員の増強については、分担金を出しているほどには人が採られていないことについてお話しした。最後に、ドイツのヘルムホルツ協会の会議について、脱原子力の動きがあるドイツのエネルギー政策、あるいは原子力政策の中で、まだ原子力の安全面での研究開発は生きており、この後どのような方向に進むのか見極めたいと思い参加した。状況は原子力にとって決して楽観できるものではないが、研究者それぞれに原子力の重要性を考えながら対応しているところが印象的だった。

( 竹内委員 ) I A E A とのチャンネルを持つことは必要であり、年に 1 ・ 2 回は接点を持つことが良いことだと思う。I N P R O、G E N - など、世界の趨勢は、核燃料リサイクルと原子力発電がセットになりつつあるので、国際的な協調路線、発信というものがこれから重要になるのではないかと思う。

( 木元委員 ) 国際協調、発信の必要性については、イラクや北朝鮮の問題に顕著に表れていると思う。プルトニウムは軍事目的に使われる可能性もある。現在、イラクに対して I A E A により査察が実施されているが、日本の原子力委員会として、きちんと平和利用が担保されているか、我々が見

つめていることを対外的にも明確に発信していかなければならない。また、日本が核兵器を持つのではないかとされていることについては、そう思われること自体が我々としては不思議であるが、実際にそのように疑われているところがあるので、メッセージを常に発信していく必要があると思う。

（竹内委員）地雷の探査やマラリア蚊の撲滅など、放射線利用の面で日本は先端的な知識がある。国際協力として、放射線利用などの面で、日本はもっと積極的に活動した方が良いと思う。

（木元委員）対外的にいくらアピールしても、国内において放射線の理解ができていなければダメになってしまう。放射線利用はまず国内を重視しなければならない。

#### （４）その他

- ・事務局から資料４に基づき３月１２日開催の「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」について説明があり、以下のとおり発言があった。

（木元委員）今回の検討会は、出席者の方々からまず御意見をお伺いし、その上で分からないことについては、こちらから積極的に質問するという場である。特定のテーマがあって議論する場ではないと思う。

- ・事務局作成の資料５の第６回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。

- ・事務局より、３月１８日（火）の次回定例会議の議題は、「原子力試験研究終了課題の事後評価結果について」等を中心に調整中である旨、発言があった。